



留学生日本語教育センターの教材開発いまむかし

JLCの教材開発いまむかし

東京外国語大学留学生日本語教育センター（JLC）は2026年3月末をもってその使命を終えました。現在、55年の歴史を振り返りアーカイブ化を進めているところです。

長年日本語教育の最前線を担ってきた歴史の中で、JLCでは初級から大学入学レベルの上級まで一貫した日本語教育教材の開発を行ってきました。開発した教材は、日本語、日本事情のほか社会科、理科、数学を合わせて100点を超えます。紙教材だけでなく音声テープ、ビデオ、FD、CD-ROM、eラーニングシステムや電子書籍もあります。

本企画展では、黎明期の教材開発と世界中で活用されてきた様子、そして最新の教材と開発過程についてご紹介し、日本語教育教材開発の歴史を垣間見ていただきます。

◆展示期間：2026年7月17日～11月末

◆展示場所：附属図書館1階展示スペース（右下図、印の建物）

※開館時間については附属図書館開館時間をご確認ください。

【東京外国語大学アクセス】

- ◆西武多摩川線「多磨」駅下車徒歩5分
- ◆京王電鉄「飛田給」駅北口より徒歩20分
- ◆多磨駅行き京王バス
「東京外国語大学前」下車



1. 日本語教育教材開発のあけぼの

1970年、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校（JLCの前身）が創設され、翌年から府中市住吉町の新校舎で授業が始まりました。附属日本語学校では、国費外国人留学生に対し、日本の大学学部に進学する前の1年間、日本語を中心に、数学、理科、社会、外国語といった科目についての教育が行われました。最新の機器を備えたL.L.

（Language Laboratory、右写真）、理科実験室、図書室、体育館など充実した学校環境のなか、新たな日本語教育教材の開発が始まりました。



2. 日本語集中教育の構想

附属日本語学校では、初代校長高橋一夫のもと、1年間で日本語の大学の講義を理解するための、徹底した集中教育が構想されました。

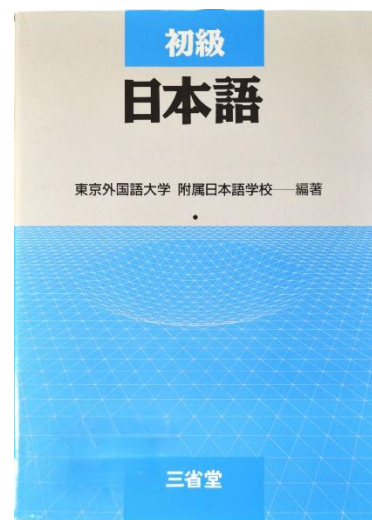
授業は年間42週から43週で、週40時間の授業が行われました。1年間で学ぶ語彙数は、約6,000語、新出漢字は1,500字と、一般的な日本語教育課程のほぼ2年分の分量でした。

当時、このような集中教育に応える日本語教育教材はなく、教員が共同研究を行い、開発していくことになりました。

3. 『日本語 I』の開発

創立当時、教材開発の中心になったのは、教務主事だった鈴木忍です。鈴木は、戦前の国際学友会における日本語教育の経験をもとに、新たな教科書を開発に着手しました。1973年ごろには『日本語 I』（上写真）をはじめとする日本語教育教材が完成しました。

その後、学内で『日本語 I』の試用と修正が重ねられ、1990年に三省堂から『初級日本語』（右写真）として刊行されました。『初級日本語』には、英語・中国語のほか、タイ語・インドネシア語・スペイン語の単語帳があり、当時の留学生がどのような地域から来ていたのかがうかがわれます。



4. 『初級日本語』の世界展開

2004年、『初級日本語』のコンテンツをベースとしたeラーニング教材JPLANが公開されました。世界中どこからでもアクセスでき、学習者は無料で音声を聞いたり、各国語（当初10か国語のちに15か国語）で文法説明を読んだり、文型練習をしたりすることができるシステムです。

『初級日本語』は、アカデミックな日本語が学べることから、刊行以来、いろいろな国で教科書として採用され、マレーシア、韓国、中国、台湾、イタリア、セルビアなど世界各国で出版されました。

